あなたの安心

上手に洗う 4

エコな洗剤…見方分かれる

あなたは粉末派？　それとも液体派？

日本石鹸洗剤工業会がまとめた今年1～6月の洗濯用合成洗剤の販売量は、粉末18万5千トン、液体15万9千トン。液体が粉末に並ぶ勢いにある。

液体の利点は、水に溶けやすいこと。汚れがひどい部分に直接塗ることもできる。洗浄力は粉末に比べて劣るといわれていたが、最近は改善されてきたという。使用量が少なくてすむ「濃縮型」を各社が販売。すすぎが1回ですみ、節水になる商品もある。

洗濯用合成洗剤をめぐっては、1960年代に界面活性剤「ABS」が川で泡立つ問題が起き、比較的分解されやすい「LAS」に切り替えられた。ただ、LASなどの界面活性剤は、毒性が強いとして「特定化学物質の把握と管理・促進法」（PRTR法）の指定物質になっている。

大半の河川では生物に有害な量のLASは検出されていないが、東京農工大の高田秀重教授は「LASの分解時に毒性のある別の物質ができる。LASが検出されないから安心、とは言い切れない」と指摘する。一方、横浜国立大の大矢勝教授は「せっけんの方が合成洗剤より毒性は低く、肌にやさしいが、合成洗剤の方が少ない量で洗え、省資源だ」と話す。環境への負荷で見方は分かれる。

どんな洗剤であれ、使いすぎず、商品に記された標準使用量を守ることが大切だ。

下水道整備が進んだとはいえ、普及率は2008年度で72・7％。家庭排水が河川に直接流れ込む地域では、合成洗剤を控えたり、使う量を抑えたりした方がよいだろう。

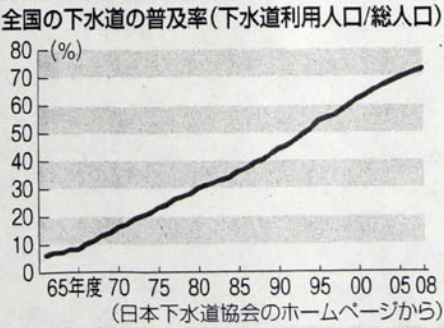
粉せっけんを使う際にはコツがいる。特に冬場など水温が低いと溶けにくい。薬学博士の田嶋晴彦さんは「バケツなどの容器を使って粉を溶かして洗濯機に入れるといい。風呂の残り湯を使うとさらに溶かしやすい」。

水道水は地域によって硬度が違う。硬度が高いほど多くのせっけんが必要になる。カルシウムなど水中の硬度成分と結びつき、洗浄力のない「せっけんカス」が多くなるからだ。「硬度が高い地域では軟水器を導入すると洗濯しやすい」と田嶋さんは話す。

洗濯洗剤、どう使う？

1. 標準使用量を守る
2. せっけんは溶かして投入
3. 排水先を意識する

全国の下水道の普及率（下水道利用人口/総人口）



（日本下水道協会のホームページから）

The Asahi Shimbun